

「男、突っ走る！」

第78回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (23) 『オフィスツリーイン』代表

國村 英作 (52) まちづくり会社社長
 伊藤 理沙 (33) 若手起業家
 大島 幸次 (52) 広告制作会社社長
 鈴木 良江 (69) 元広告制作会社営業担当

国枝 中枝 (58) 市民映画プロデューサー
 山田 敦夫 (43) 劇団主宰者
 田所 俊子 (62) 市民映画プロデューサー
 橋本 久悟 (48) WEB会社社長
 阿武 振付師

野倉 浩平 (21) 『スリジエネ』メンバー
 藤田 昇平 (21) 『スリジエネ』メンバー
 前川 海司 (29) 『スリジエネ』メンバー
 山森 直美 (18) 『スリジエネ』メンバー
 富永 美茜 (22) 『スリジエネ』メンバー
 佐藤 麻美 (21) 『スリジエネ』メンバー
 大坂 中央 (16) 『スリジエネ』メンバー
 石井 子央 (24) 『スリジエネ』メンバー
 花井 忍奈 (23) 『スリジエネ』メンバー
 熊瀬 怜奈 (17) 『スリジエネ』メンバー
 河辺 真恵 (21) 『スリジエネ』メンバー
 長野 優美 (17) 『スリジエネ』メンバー

1 木内家・雅也の部屋（夜）

原稿用紙に向かってペンを動かしている雅也。

N 「個人事業というのは繁忙期の時はそれなりに忙しく、逆に仕事がないときは恐ろしいぐらい暇なもの。市民ミュージカルの稽古は日曜日で、それ以外の曜日でセリフや歌、ダンスを個人で覚える時間も必要でした。とにかく足を引っ張らないようにしなければという気持ちで必死だった僕は、仕事の合間を縫っては個人練習をしていました。この頃、地元フリーペーパー『デイズ』の夏号制作は佳境を迎え、また千葉の山岡プロデューサーからの依頼で、もう一本千葉県ローカル局で放送される深夜ドラマの脚本を書かせていただくことになりました。何でも、ゴールデンウィークの時にピンチヒッターで書いたものが好評で、またもう一本新作を書いてほしいと、タレント事務所から要望があったそうです。も

ともと脚本を書きたいと思っていた僕にと
っては、これほどありがたい仕事はありま
せんでした。ただ、以前と変わったことと
言えば、すっかり演じる側になったことで
セリフを考えながら、つい自分で演じなが
ら書くようになってしまったということ
です。そういう面では、やはり『スリジェネ』
の日々の稽古が活かされているのだと実感
していました。ただ、この直後、思いがけ
ない仕事の依頼がやってくるのです……」

2 中央公民館・ラウンジ

雅也と佐代子が話している。

雅也「え？ 販売用のパンフレットですか？」
佐代子「そう。この間、みんなで浴衣着てメ
インビジュアルの撮影したでしょ。あの時
のカメラマンさんが、稽古中のみんなの写
真も素材用として撮ってくれたの。で、
その写真見たら、みんな良い顔で稽古して
るのよ。何とかこういう写真を使えないか

と違って、販売用のパンフレット作ろうと
思っで。当日、ワンコイン五百円で受付で
販売すれば、今回の資金調達にもなるでし
よ。されど五百円だけど、十人買ってくれ
たら五千円になるしね」

雅也「確かに」

佐代子「冊子制作といえは、うちーでしよ。
だから、どうかと思っで」

雅也「分かりました。一回台割、作っでみま
す」

佐代子「ありがとう」

N「このパンフレット制作の依頼を受けてす
ぐ、僕はメンバーである忍と一緒に、国枝
さんと田所さんがパーソナリテイーを務め
るラジオ番組に、『スリジェネ』のメンバ
ーとして出演することになりました」

3 ラジオ局・収録室

雅也、佐代子、田所、忍が集まっでい
る――マイクのセッティングなどの準

備をしているディレクター。

雅也「二度目ですね、ここのゲストは」

田所「そうね。うっちー、去年一回来てくれ

たわね」

忍「そうなんだ」

雅也「まさか今回は、『スリジェネ』のメン

バーとして出演するとは思いませんでした

けど」

佐代子「それもそうね」

雅也「(資料を渡して)あ、国枝さん。これ、

この間話してた販売パンフレットの台割案

です」

佐代子「ありがとう。早速作ってくれたんだ」

雅也「早い方が良いと思って。内容としては、

あらすじ、関連図、キャスト紹介、プロダ

クトノート、使用楽曲の歌詞掲載を現状入

れてあります」

佐代子「せっかくだし、私とヤマさんの対談

も入れてもらえるかしら」

雅也「見開きで二ページとして、今表紙と裏

表紙入れて十八ページですね。中綴じだと四の倍数にする必要があるんですよ。あと二ページ、何か入れれると良いんですけど」

佐代子「地元企業の方に、協賛してもらおうようにするわ。そのの広告枠として空けていて」

雅也「分かりました。協賛企業さんには、ロゴマークとか写真とか住所とか、入れてほしい素材を一式用意していただくように伝えてください。もしデータがなければ、こんな風に作ってほしいという簡単なラフや参考資料ももらっておいていただけると助かります」

佐代子「オツケー。それは、また各企業さんと相談してみる」

雅也「お願いします」

佐代子「対談、何話そうかな？」

雅也「作品への想いとか、今後の『スリジエネ』のビジョンとか、立场上そういった話のほうが良いんじゃないですか？」

佐代子「それもそうね」

雅也「運営会議かどこかで、一度対談の時間作ってもらえますか？　そこである程度の構成作って、原稿も書きたいので」

佐代子「分かった。運営会議の時間、調整してみるわ」

雅也「二ページ分の対談で、お二人の写真入れるとなると、大体三十分から四十分二人で対談してもらえたら」

佐代子「そんなに話せるかな」

雅也「おしゃべりなお二人が、何を仰いますか」

佐代子「あら、うちーも言うようになったわね」

雅也「失礼しました」

忍「うちーが仕事してるよ」

雅也「だって、こっちが本業だもん」

忍「そっか」

田所「いろいろ活躍してるもんね、うちーは」

雅也「いえいえ、とんでもない」

ディレクター「お待たせしました。では、準備お願いします」

一同「はい」

×

×

×

『収録中』のランプが光る。

×

×

×

収録している一同。

佐代子「さあ、では早速本日のゲストをご紹介します。この夏、市民ミュージカルに出演するために結成されたパフォーマンズグループ『スリジェネ』のメンバー、うちーとシノブです」

雅也「こんばんは、『スリジェネ』のうちーです、よろしくお願いします」

忍「『スリジェネ』のシノブです、よろしくお願いします」

田所「何と市民ミュージカルに挑戦するとうことですけど」

忍「そうなんです。十三人の十六歳から二十

九歳の男女で結成されて、今、稽古頑張ってます」

雅也「僕は、実は演技初挑戦で、とにかくメンバーのみんなに迷惑をかけないように、必死になってます」

忍「演劇とか、お芝居の経験者がほとんどなんです、『スリジェネ』のメンバーは」

雅也「プレッシャーですよ」

忍「でも、うちーはメンバーを盛り上げてくれる、面白いリーダーです」

雅也「経験者のシノブにそう言ってもらえるのはありがたいです。でもそういうシノブも、明るくてほんわかしてて、メンバーの癒しキャラです」

忍「ありがとう」

田所「メンバー同士、仲良いんですね」

雅也「やっぱり、一つの作品に向かってみんなが同じ方向を向くわけですから、必然と団結力は生まれてくると思います」

N「ちなみに先月は、とみーとショウが出演

し、二ヶ月連続で宣伝も兼ねて、『スリジエネ』のメンバーがゲスト出演するということになりました。自分の番組を使って、上手に宣伝活用する国枝さんのプロデュースと企画力は、すごいと改めて思いました」

4 木内家・雅也の部屋（夜）

パソコンで作業をしている雅也。

N 「フリーペーパー『デイズ』のページ数が二十ページ、そして市民ミュージカル『七夕物語』の販売パンフレットのページ数も二十ページ。僕は同時期に、二冊合計四十ページの冊子を作ることになっていたのです」

5 中央公民館・全景（数日後）

6 同・和室

イヤホンをつけて音楽を聴きながら、ダンスの振り付けを小さく練習をして

いる雅也——ドアが開き、大島と佐代子が入ってくる。

雅也「（慌ててイヤホンを取って）おはようございます」

大島「何してんの？」

雅也「ダンスの振り付けの練習してたんですよ。もう空いてる時間があつたら、とにかく覚えなきゃと思って」

大島「よくやるな」

佐代子「結構うちー頑張ってるんですよ」

大島「（雅也に）うちーって呼ばれてるのか？」

雅也「僕のニックネームですから」

N「この日、久しぶりに『ぷれいす』の編集会議が行われました。良江さんが大島さんの会社を辞めた後、しばらく編集会議もでの会社を辞めた後、しばらく編集会議もできていないまま時が流れてしまっており、春号発行から約二ヶ月半が経っていました」

×

×

×

雅也、國村、伊藤、大島、佐代子、橋

崎が編集会議をしている。

國村「久しぶりの編集会議で申し訳ありません。良江さんが大島さんの会社を退職した後、次の号に向けて進めれたらと思ったのですが、予算の都合上、次号発刊が未定になっていました。その後、大島さんや理沙ちゃんと相談させてもらって、次号からはタブロイド紙で発行しようかと思っていました」

佐代子「タブロイドって、新聞みたいにすることですか？」

大島「新聞に近い体裁にするから、サイズはB3。ただ、冊子みたいにホチキス綴をするわけじゃなくて、新聞と一緒に追った状態のものを重ねていく、スクラム製本になる。これなら、印刷コストも抑えられるから、俺から國村さんに提案した」

橋崎「新聞みたいになると、配布も難しいですよね。元々はA4だったわけですし、広げてB3ってことは半分に折ったとしても

B4。設置にも結構なスペース取りますよね」

伊藤「でも、それが今一番制作できる唯一の方法なので、設置先のスペースを取ること
はあまり優先したくありません」

雅也「新聞みたいなデザインに変更すると、
台割というかそもそもページ構成も変わって
きますよね。スポンサー枠とかも」

大島「そうだな。表紙という概念がなくなっ
て、特集というか一番見せたい記事を大き
な写真一枚と数枚の写真で見せるとか、こ
れは内容や紙面構成をしてみないと何とも
言えないが、まあ雑誌とは根本的に体裁が
変わるの間違いはないな」

佐代子「どんな形でも、『ぷれいす』が続け
られるんだったら、私はそれで良いと思っ
ますけど。ただ、スポンサーをどう取って
くるかですけどね」

國村「そうですね」

難しい顔の一同。

N 「次号に向けての話し合いが行われたものの、結局これが最後の編集会議となつてしまい、『ぷれいす』はフェードアウトする形で、創刊準備号と一号目と二号目と合計三号発行して廃刊となつてしまつたのでした」

7 駅・ロータリー（数日後）

雅也が待っている。

N 「編集会議から数日後、僕は『ぷれいす』の営業担当だった良江さんから連絡をもらい、良江さんの地元でランチをすることにまりました」

一台の乗用車が入ってくる——運転席から鈴川が顔を出す。

鈴川 「木内君」

雅也 「良江さん」

鈴川 「乗って」

雅也 「はい（と助手席に乗り込む）」

8 レストラン

ハンバーグラランチを食べている雅也と

鈴川。

雅也「うん！ 美味しいです」

鈴川「でしょ。ここは、この辺りじゃ人気のお店なのよ」

雅也「そうだったんですか」

鈴川「どう、最近？」

雅也「市民ミュージカルの稽古で、全身筋肉痛です」

鈴川「ああ、国枝さんのやつ」

雅也「ええ。同年代や高校生の子たちと一緒にやってるので、何だか学生の時にみんなで何かをやったのを思い出します。仕事の同僚ができたみたいな感じですよ。普段一人で仕事してますから」

鈴川「楽しんでるなら良いけどね。『ぷれいす』のほうは、どう？」

雅也「この間、久しぶりに編集会議で集まったんですよ」

鈴川「あら、しばらくできてなかったの？」

雅也「ちょうど、良江さんが辞めてすぐの頃からですね。僕や国枝さんや橋崎さんも、市民ミュージカルの運営の方でバタバタしてましたし、大島さんも今年の夏祭りの準備が始まったタイミングだったみたいで」

鈴川「続きそうなの？ 私の見解としては、そろそろ『ふれいす』も廃刊するんじゃないかって思ってるけど」

雅也「大島さんの意見で、雑誌みたいな体裁じゃなくて、タブロイド紙発行の案が出ました」

鈴川「タブロイド紙ってことは、新聞？」

雅也「はい。なので、構成も何もかも変わっちゃう気がします」

鈴川「まあ、新聞みたいな作りのフリーペーパーはないわけじゃないけど、『ふれいす』ってシニアをターゲットにしてたから、文字サイズだって大きめに設定したんでしょ。タブロイド紙で、文字大きくしちやったら

デザインの的に何かダサくなるような気がするけどね」

雅也「フリーペーパー制作は、継続することが難しいですよね」

鈴川「あの商店街でも、以前商店街のことを発信するフリーペーパー作ってたけど、そんなに長続きしなかったと思う。自社で発行して経費も全部会社持ちのフリーペーパーだったら、ネタが尽きない限りはいくらでも発行できるかもしれないけど、よそからスポンサーや協賛を集めてフリーペーパーを作るのは、結構大変なのよ。結局デザイン制作費や印刷費、人件費とか発行するにあたっていろいろな費用がかかるからね」

雅也「そうですよね」

鈴川「木内君が自分で作ってるフリーペーパーは、どうなの？ 確か、春には市長のところへ表敬訪問行ったんでしょ」

雅也「ええ。今は夏号に向けて、まもなく佳境を迎えています。スポンサーは何とか集ま

ったので、後は紙面のデザインと校正作業をひたすらやるばかりですね」

鈴川「忙しいのは良いことだけど、無理はしないですね」

雅也「はい」

鈴川「市民ミュージカルの本番、私、見に行くわ」

雅也「本当ですか？」

鈴川「木内君がどんな風に舞台に立ってるのかも見てみたいし、国枝さんのプロデュース力っていうのも気になるし」

雅也「ありがとうございます、ぜひお待ちしています」

微笑んで頷く鈴川。

9 木内家・全景（夜）

10 同・雅也の部屋

赤ペンを片手に、印刷したデザインの校正をしている雅也——時折、大きな

あくびをする。

時計を見ると、深夜二時半になっている。
る。

雅也「（溜息をついて）今日はもう寝よう」

と、赤ペンを置くと、そのままベッド
で横になる。

N「山岡さんから依頼を受けたドラマの脚本
を無事に書き終えてひと段落したのも束の
間、フリーペーパー『デイズ』の編集作業
と同時進行で、『スリジェネ』の当日販売
パンフレットの編集作業をしており、この
頃は不規則な生活が続いていました」

11 南公民館・全景

12 同・大会議室

壁に備え付けの鏡を見ながら、音楽に
合わせてダンス稽古をしている雅也、
浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、
美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美

——真ん中で手本をしている振付師・

阿川武久（37）。

演出席で、その様子を見ている山中。

N 「『七夕物語』全般の振り付けをすることになったのは、国枝さんの市民映画にも出演をし、普段は豊田市で自身の劇団を主宰されている阿川武久さん。音楽イベントでもダンサーや振付師として活動をしている方でもあります。阿川さんが、ハルさんが作曲をした劇中歌の全てと、オープニングで披露するメインテーマの振り付けを担当することになりました。劇中歌の作詞はヤマさんが、メインテーマの作詞は国枝さんがそれぞれ担当しました」

ダンスのラストの決めポーズをする一同。
同。

阿川 「はい、じゃあ水分補給の休憩十分取ります」

一同、端に置いてあるペットボトルや水筒で水分補給をする。

雅也、タオルで汗を拭く――すると、突然めまいに襲われて、その場に倒れてしまう。

浩太「うっちー？」

茜「うっちー、大丈夫？」

一同、雅也に「うっちー！」と言いな
がら、それぞれ駆け寄る――山中が慌
てて駆け寄ると、

山中「うっちー？ 大丈夫か、うっちー？

（と麻美に）アサミン、国枝さんに連絡し
て」

麻美「はい」

山中「うっちー、うっちー」

反応がないままの雅也。

つづく